

「加害と被害の重層構造—日本人の戦争体験をとらえ直す」

林 博史

(関東学院大学経済学部教授)

はじめに—研究のきっかけと「加害と被害の問題」について

私は、山本宗補さんの写真集『戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶』の出版にあたって解説を依頼され、その時にこれらの写真を初めて見ましたが、非常に衝撃的でした。そのときはきれいな紙にプリントしたのではなく、薄い紙に印刷されて送られてきたのですが、写真というものは人の表面を撮っているが、その人の深い体験、あるいは何十年ものいろいろな思いが表現されており、これはいったい何なんだ、これはすごいなと思いました。私はもっぱら言葉、つまり話したり書いたりすることで伝えようとしていますが、写真はいくら言葉で表現しようとしてもできないものをたった1枚の紙で表現できるのだということにあらためて衝撃を受けました。そうした写真集に私が解説を書かせてもらえるということは有り難いことだと思います。

私が大学教員になったのは1985年です。大学院時代は、なぜ日本はあの侵略戦争とファシズムに突っ走っていったのか、どうしてそれを止められなかったのかを問題意識として研究をしていました。つまり、戦争そのものについては研究していませんでした。これは当時の日本現代史の研究者全体がそうでした。おそらくそれは戦争を体験した世代がいて、あのような時代を二度と繰り返してはいけないということが前提として共有されていたからです。

1980年代中ごろの中曽根内閣時代、日本が戦争に関わりそうだということで、日本現代史の研究者の中でも、あの戦争で日本がいったい何をやったのかがほとんど研究されていないことを自覚して実証的に研究する必要があるという声があがり、学会が少し変わり始めていました。私は、その時期に大学院生から教員になる時期を迎えて、戦争問題に取り組み始めたのです。

1987年の夏にマレーシアへ行く機会がありました。そこで戦争中にマレー半島で日本軍が、中国系の住民(華僑)をあちこちで虐殺をしていたことを知りました。今回、山本さんの写真展の中でもかろうじて生き



残った方の写真が含まれています。その虐殺は1942年の3月に集中していたのですが、当時だれもそのことを研究しておらず、具体的なことはわかりませんでした。そこで資料を探したところ、マレー半島で虐殺を行っていた日本軍の命令書や「陣中日誌」を見つけたのです。これらの資料を1987年12月に新聞で紹介し、そこから資料を見つけた以上、責任を持って自分がこの問題を研究しなければならないと本格的に研究を始めました。

当初から「加害と被害の問題」は考えていました。栗原貞子さんの『ヒロシマというとき』という有名な詩にありますが、マレー半島で住民殺害を行った部隊が実は広島市を含む広島県西部から徴兵された兵士の部隊だったのです。まさに原爆被害のシンボルである広島から出征した兵士たちがマレー半島で虐殺をしていたと報道されたことは、広島の中でも大きな反響がありました。そこから戦争被害の象徴である広島と日本の抱えている問題を考え始めたのです。

また、石河逸子さんも何度かマレーシアを訪れ、話を聞いたり現場に行ったりして詩を書かれています。

マレーシア人被害者と被爆者の交流

日本軍の資料の発見が報道されたこともあり、大阪をはじめ各地の市民グループが住民虐殺からかろうじて生き残ったマレーシアの人たちを日本に招待し証言

集会を全国で行いました。

2012年に亡くなられ、山本さんも写真を撮られているショー・ブンホーさんは、両親と弟と妹の5人家族でしたが、生き残ったのは彼1人でした。彼の身体にも銃剣のあとが何か所かありましたが、これは日本軍に銃剣で刺された時、上に覆いかぶさった母のおかげで軽傷で済みました。1988年8月、私はショーさんを含む5人のマレーシア人と一緒に広島へに行きました。

彼らの村の虐殺を行った部隊は広島の歩兵第11連隊で、現在の広島城の濠の東側に記念碑があります。そこにはマレー作戦に参加したことに触れ、非常に勇戦奮闘してよく郷土部隊の名声を高揚したということが書かれています。この碑の前で彼らは非常に怖い顔で固まっていたことを今でも覚えています。その後、彼らは原爆の慰霊碑に「マレーシア虐殺村受難者一同」と書かれた花を捧げて、原爆の被爆者、犠牲者を追悼しました。続いて、原爆資料館を見学し被爆者の方たちと交流をしました。その際、彼らの一人から被爆者の方に「原爆が投下されたことをどう思いますか」と質問があり、アメリカを批判するような返答がありました。すると彼らは、日本軍がひどいことをやらなければ原爆を落とさなかったはずだ、原爆がなければ自分は殺されていたからこうして日本に来ることもできなかったということを口々にいいました。それは私にとって非常に衝撃的なことでした。

その翌日、被爆者の沼田鈴子さんと彼らが会った時、沼田さんは「私は被爆者です。今日の皆さんの話は涙なしには聞けませんでした」、「深くお詫びします」といって頭を下げたんです。沼田さんが片足を切断されていたということ、それからその前に会った被爆者とは違い女性であったこともありますが、まず最初に、残酷なことをしたことをお詫びした沼田さんに対して、彼ら5人はそばに駆け寄り手を握って「あなたの受けた悲しみを理解することができます」といったのです。特に女性の方が泣きながら沼田さんの手を握ったことを今でも覚えています。

これは日本がマレーシアで行ったことをどう見るのか、あるいはどう説明するのが重要で、そのことによってこれだけ違った反応になってしまうということを経験した事例です。この時から私は、加害と被害をどう捉えるのかということはずっと考えてきました。

その翌年、マレーシアから広島に来て原爆の慰霊碑に花を捧げてくれたことに対して、広島に被爆者の方がマレーシアの現地に行って追悼する取り組みがあ

り、私も同行しました。この取り組みは1989年3月に行われ、マレーシアでは大変歓迎されました。その歓迎会で沼田さんが挨拶し、日本軍がおこなったことについてお詫びをした上で、今後はきちんと日本に事実を伝えていきたいというお話をしました。その会で、マレーシアのある方が沼田さんに、「私は父と弟を殺されて以来、日本と決して関わらなかったけれども、今沼田さんに会って、あなたもまた戦争の被害者であることがわかったんだ」と話しかけていました。このように、少しずつですが両者が理解できる交流が始まっています。

広島を歴史を振り返ってみると、1894年の日清戦争直前に山陽本線（国鉄、当時は省線）が広島まで延長され、開戦後には宇品まで突貫工事で開設されました。広島は、宇品港から中国や朝鮮に向かい日本軍が出発したところで、湾をめぐるように呉、江田島、それから岩国もある重要な場所でした。そして、広島に司令部があった第5師団（この中の幾つかの連隊がマレーシアで残虐行為をした）もここから出て行きました。

現在も自衛隊、あるいは東アジアでも最大のアメリカ軍の弾薬庫があります。アメリカ軍は、中東での戦争の時にここから弾薬を運んでいました。つまり、イラクやアフガニスタン等でアメリカ軍の空爆により人々が殺されている時、実はここにある弾薬が使われていたのです。そのこともあり、広島の中でも原爆については戦争の歴史をきちんと顧みてから教えないといけな、という取り組みが始まっていきます。

誤解のないように言いますが、私はこういう加害の歴史があったから原爆を落とされても仕方がないとか、当然だというつもりは全くありません。やられたらやり返すというのは、戦争をどんどん拡大させるだけです。ただ、原爆が落とされるに至る過程、なぜ落とされたのかという点を見ると、その前史があります。そこを見ないと、なぜそうってしまったのかということがわかりづらいのです。加害と被害は切り離されている問題ではなく、加害の歴史の中のひとつの帰結として被害があるということを考えなければと思っています。

日本人の戦争加害と被害を生み出した歴史的背景

非常に大ざっぱに近代史を考えると日本は後発国になります。後発国である日本は、当時の先進国である帝国主義国に追いつこうとして無理を重ねてきまし

た。そこでは、自由や民主主義を育てるより国家主導の経済成長、軍事力増強、つまり富国強兵を進めていきました。加えて、日本が欧米の帝国主義国と少し違うのは、軍事進出していった先が中国や朝鮮半島という近隣諸国であったことです。それらの国は、経済的、文化的、社会的にも日本と大きな差がなく、これがおそらく大きな軋轢のひとつの要因になっていると考えられます。

先進国に追いつこうとすることには2つの側面があります。当時、先進国である帝国主義国は自分たちのことを「文明国」といい、アジア・アフリカの人々は「非文明国」で野蛮だといいました。当時の国際法は「文明国」である帝国主義国が作ったのです。

日本が先進国に追いつこうとした場合、一面では「文明国」として国際ルールをある程度は尊重しようとする傾向があります。例えば日露戦争では、ロシア軍の兵士を捕虜として人道的に待遇し、先進国としてはその必要があるという意識が働いていました。一方で、当時の国際法は「非文明国」には適用されないという考え方があり、「文明国」同士の戦争には国際法を適用するが「非文明国」、あるいは野蛮な人々との戦争には国際法を適用しないという差別思想もありました。おそらくこれは現在もあると思います。このダブルスタンダードにより、欧米に対してはある程度国際的なルールを守ろうとするが、「非文明国」である中国や韓国には国際ルールは適用しないということになってしまいます。日本人の持っているこのダブルスタンダードは、まさに今日まで続いている問題だと思います。

その後、大正デモクラシーや政党政治の時代があり、特に1930年代の中ごろから天皇を神聖視して、皇軍、天皇の軍隊だとか神国日本ということがいわれるようになります。1930年代後半から40年代前半の日本は自由主義や民主主義、あるいは人権や平等ということを西欧的な価値観だと否定します。国際法についても否定する国家でした。アジアに対する差別意識と欧米に対するコンプレックスがあり、非常に極端で独善的な意識が育てられたというのが当時の日本でした。

いわゆる15年戦争（1931年～45年）で亡くなった人はどれくらいいるのでしょうか。これは私の推定ですが、日本は約310万人、中国は1,000万人以上になります。もっと多い可能性も十分にあります。そのほか、フィリピン約111万人、インドネシア約400万人はそれぞれの政府が主張している数字です。日本が行った戦争による死者は全体で2,000万人といわれますが、こ

れは非常に大ざっぱな数字です。傷ついたり、家を失った人々、あるいは家族が亡くなった人々を含めると膨大な人数になります。

西欧帝国主義との関連

日本の加害の問題を取り上げると、なぜ日本のことだけいのかと指摘されることがしばしばあり、最近ではさらに、ほかの国でもやっているではないかといわれます。西欧の帝国主義国は、アジアやアフリカであれば先住民、アメリカ合衆国であればネイティブアメリカンやインディアンとよばれる人々を排除し、虐殺し迫害してきたという歴史があります。日本が植民地を持ち始める時期、19世紀の終わりから20世紀の初頭はそういった帝国主義国が非常に残虐なことを世界各地で同時にやっている時期でもありました。例えば19世紀の終わりに、アメリカはハワイ王国を併合し、スペインとの戦争に勝利しスペイン領のフィリピンをアメリカの植民地にします。グアムやプエルトリコもアメリカに併合したのですが、特にフィリピンでは非常に残虐なことをアメリカ軍は行っていました。

南アフリカのボーア戦争ではイギリス軍が非常に残虐なことを行っており、いわゆる強制収容所の原型はこの時にイギリスが作りしました。ガス室こそありませんでしたが、のちのナチスが作る強制収容所の原型となったのです。その頃の日本は、台湾、朝鮮の植民地化という一種の戦争を行っており、この時期、アメリカ、イギリスそして日本も、同時に非常にひどいことを行っていたのです。

兵器としての飛行機と日本の戦争の特徴

20世紀に入ると、飛行機が兵器として使われ始めます。飛行機は開発されてすぐに軍事利用されますが、植民地にするための戦争では民衆が起こす反乱を鎮圧する際に威嚇のために利用されました。

アメリカの日本に対する空襲は、最初は軍事目標(工場や軍事施設)をねらっていたのが、のちに無差別爆撃になったといわれています。世界史的に見るとそもそも空襲は「文明国」ではない野蛮な民衆を威嚇し、あるいは恐怖を与え、支配するための道具として使われてきたのです。これはおそらくベトナム戦争や現代のアメリカの空爆につながっており、世界は全く反省していないのです。

国際法というのは「文明国」にしか適応されないという日本を含めた西欧の帝国主義の歴史がありますが、中でも日本は独自性があると思います。1930年代

後半から1945年までの日本は、自由、民主主義、人権などを否定した社会でした。そして国際法も認めなかったのです。

日中戦争を現在では戦争と呼んでいますが、当時は戦争とは呼んでいませんでした。1937年から中国との戦争が全面化した時も日本軍は、中国の捕虜に対して国際法を遵守する必要はないという命令を、中国に派遣している軍に出していました。

太平洋戦争にあっては開戦の証書が、昭和天皇の名前を出されています。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦では、天皇が宣戦布告した際の証書の中には「国際法を遵守しなさい」あるいは「国際法を守って戦いなさい」という趣旨の言葉が入っていたのですが、太平洋戦争開戦の証書からその言葉は消えます。つまり、もう国際法を守る必要はないと判断したということです。

さらに、日本軍は捕虜を認めない軍隊です。これはおそらく20世紀の軍隊では極めて異例です。ナチスドイツでさえ部隊ごと投降することも少なくなく、何万人、何十万人という単位で捕虜になりました。しかし、日本軍はそれを一切許しませんでした。

そして、性暴力、特に慰安所のようなシステムを第二次世界大戦において作ったとはっきりわかっているのは今のところドイツと日本だけです。

そのほか、内面、心の支配と抑圧という、日本の支配の特徴があります。これは植民地支配も含めた占領支配もそうですが、人の内面を支配しようとします。これは日本の植民地支配、占領支配の大きな特徴です。人の内面というのは本当のところ何を考えているかはわかりません。すると、建前や形式が強調されますから、例えば神社、皇居あるいは日の丸に向かって頭を下げるようになります。かつてのキリスト教徒に対する踏み絵のようなものです。そのような形で内面を支配しようとするのは日本の支配の一つの特徴です。

イギリスの植民地支配では、おおよそ経済的な利益を得られればそれ以上は現地の風俗習慣には介入しないというやり方で、現地の習慣などは差し障りがない限りには放任しています。一方、日本の場合は内面まで支配しようとするので、当然反発を生むわけです。

国際比較を行う場合に、その国の自由民主主義や人権のレベル、女性に対する人権のレベルの違いを考えなければなりませんし、帝国と植民地、属領、属国という関係も重要です。さらに、戦争の性格です。第二次世界大戦では、例えばアメリカはひどいことをしていますが、あくまでも日本とドイツという自由や民

主主義を否定するような国の侵略から多くの国々を解放するという建前として自由のための戦いということにしていました。そのことがそれぞれの軍隊の戦争のあり方にずいぶん影響しています。

世界史の中の15年戦争

世界史の流れで、第一次世界大戦というのが1914年から1918年まであります。この出来事は、世界史にとって大きな転換期だといえます。例えば、侵略戦争はだめだというような戦争責任という概念は第一次世界大戦後に生まれます。

一方、第一次世界大戦の前から、戦時国際法というたとえ戦争をすることもやっけてはいけないことがあるという考え方もありました。例えば、捕虜は人道的に扱わないといけないから虐待するのは違反である、占領地の住民は人道的に扱わないといけないから虐殺したり、レイプをしてはいけないという考え方です。つまり、戦争を始めること自体も問題であるという考え方と同時に、仮に戦争になった場合でも、許されることと許されないことがあるから、許されないことをすれば戦争犯罪であるという考え方が本格的に登場した時期でした。

かつて帝国主義国は、ずいぶんひどいことを散々やってきたわけですが、そのまま続けてはまずいという反省がヨーロッパの中で生まれます。第一次世界大戦は主にヨーロッパの戦争ですから、政治の延長として戦争を認めたり、戦争における残虐行為を放任しておくともヨーロッパは大打撃を受けるわけです。そのため、戦争そのものを規制することが必要だということに世界史の流れが変わっていきます。

ところが残念ながら日本はそうした流れに乗らず、むしろ流れに逆らう形で太平洋戦争を始めてしまいます。第一次世界大戦前の日本がしていたことは、欧米がしていたことと同じだといってもおかしくないと思うのですが、ただ欧米はそこから少しずつ変わり始めていました。その中で日本は元のやり方、あるいはそれ以上に、あらゆる自由主義や民主主義、人権を否定するような方向で戦争をしてしまったのです。そのため、第二次世界大戦では日本やドイツがとりわけ問題にされたのです。19世紀から20世紀初頭の西欧はひどいことをしていたということを持ち出して日本の行いを弁解しても、世界は変えようという方向に行きつつある時に日本、ドイツ、イタリアが逆転してしまっていたのです。

日本と日本軍のあり方をめぐって

近代の日本は脱亜入欧、富国強兵と進んでいきましたが、特に一貫して西欧、白人へのコンプレックスと、アジアの人々に対する差別意識がずっとありました。この意識は明治の初め以来今日でも継続していると思います。

これは日本軍の兵士の問題でもあります。軍隊生活を含めた暴力、人権抑圧、人権無視という問題で、日本軍においても、大正デモクラシーの時期に、兵士たちの人格を尊重しようとか、本人の自覚心を向上させようという考え方が部分的ではありますが導入されました。

戦中は、天皇や上官の命令には絶対服従ですが、大正デモクラシー時代には上官から不条理な扱いを受けた場合に上官に意見を述べる、上申することができるという規定がありました。さらに、それに対して上官は異議申し立てを妨げてはならないという規定もありました。この時期日本は少し変わり始めていたのですが、1930年代にはこれが逆転していきます。

1934年に軍隊内務書という軍隊内部のマニュアルが変えられ、天皇の軍隊、皇軍ということがいわれるようになります。この時、上官に対する上申について、異議申し立てを妨げてはならないという項目などが削られています。この項目は1943年まで残りますが、1943年には、上申そのものが否定され、だいたい1930年代の後半から、上官の命令には絶対服従であるという考え方が生まれていきます。

つまり、上官の命令は絶対であるという無条件の服従の思想は、必ずしも明治以来一貫していたわけではなく、1930年代後半に起こる自由、民主主義、人権を全部否定していく流れの中で軍隊のあり方自体が変わっていったといえます。兵士の人権を無視することが、当然市民の安全、生命の安全を無視すること、諸外国の兵士や民間人の人権、生命を無視するということにつながっていくのだらうと思います。

私は日本軍の慰安婦問題について書いたり、話したりすることがありますが、いつも思うのは慰安所に兵士たちがズラッと並んで待っている写真を見て、兵士たちはまともな人間として扱われておらず、そういう形で性欲を処理さえすればおとなしくいうことを聞くものだと考えられており、それはひどい扱いだと感じます。もちろん慰安婦にさせられている女性のほうが、もっとひどい状況にあることはいままでのですが、あの兵士たちだってまともな人間として扱われて

いないのです。

慰安所というシステム自体が、女性に対する徹底した人権蹂躪じゅうりんであると同時に、兵士たち自身もまともな人格のある人間として扱われていないというシンボルなのです。それを必死で正当化しようとする人々は何なのでしょう。兵士の人権や人間性さえも否定するような日本軍のあり方があのような慰安所のシステムを生み出しており、そこでは女性がもっとひどい状況に追いやられていると考えていいのではないのでしょうか。

宮崎にあるテレビ局が作った番組で、米軍が沖縄を占領したあとに、鹿児島から宮崎に上陸する作戦（オリンピック作戦）を行うことに対する日本側の本土決戦準備について扱ったものがありました。私はスタジオでコメントをする役割でした。

米軍が上陸するとなった時、住民はどうしたのでしょうか。九州の日本軍は、住民の疎開について検討していますが、疎開させない結論に至ります。なぜなら、疎開させるためには輸送手段や滞在施設、食糧が必要ですがそれが用意できないのです。そこで住民は戦場に放置するという結論になります。足腰の立つものはすべて兵士として、竹やり訓練、棒地雷（竹槍の棒の先に爆弾をつけて戦車に突き進む）の訓練をやらされてきました。

今回の取材のなかで出てきた証言で、小学校4年生の生徒たちが学校で集団自決の訓練をやっていたことがわかりました。みんな肩を組んで円陣になり、児童の一人が円陣の真ん中で手榴弾を爆発させる訓練です。これは沖縄でも聞いたことがありません。

つまり、米軍が上陸してくるのに住民は疎開出来ずに戦場に取り残されます。当然、アメリカ軍は上陸前に空爆あるいは艦砲射撃をしますから、まずその段階で多くの犠牲が出ます。それから米軍が上陸してくると住民は逃げまどうわけですが、アメリカ軍の捕虜になってはいけないことが軍人だけではなく民間人にも強要されていますので、自決するのです。もし本土決戦が行われて宮崎が戦場になっていたならば、沖縄戦と同じような、あるいは沖縄戦以上の犠牲が出ていたかもしれません。

日本軍の戦い方からは、兵士は捕虜になるな、みんな爆弾を抱えて戦車へ突っ込んで行けというように、兵士を人間として見ていないだけではなく、日本国民に対しても人間として大事にせずに軽視するという思想が日本国全体の中にあっただのではないのでしょうか。

日本軍はアジアの人々に対してさまざまな残虐行為

や非人道的なことを行ったのですが、その背景として日本軍の兵士、あるいは日本の普通の人々がまともな人間として扱われていない、生命が非常に軽視されているという事実があり、その矛盾をどんどん外に広げていったのではないかと思います。

日本軍が捕虜を認めないという考え方は、1930年代からですが、それ以前は日本軍の中にも捕虜になった兵士たちがいました。例えば、1924年に「陣中要務令」というマニュアルが作られますが、やむをえず負傷した者は赤十字条約の保護に委ねればよいという規定があります。言い換えると、あくまで負傷者という限定つきですが捕虜になることを認めているのです。大正デモクラシーの時期の日本軍には別の可能性があったのかもしれませんが、ところが、1939年には「陣中要務令」が「作戦要務令」に名前を変え、その時には死体も負傷した者も敵の手に落ちないようにせよ、となってしまう。そして、捕虜になるくらいなら死ねというふうになっていくのです。

「戦陣訓」の中に「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」という有名な言葉があり、これが捕虜になることを禁じたといわれることがあります。これは不正確です。「戦陣訓」は命令ではなく、あくまでも陸軍大臣の訓示です。もともと「戦陣訓」が作られた背景というのは、当時中国にいた日本軍があまりにもひどい残虐行為や放火、強姦、略奪をしていたため、中国人が反日感情をどんどん持ってしまうと考え、兵士たちに対して「もう少し慎め」ということをいうために作られたものなのです。

これを作った担当者の証言では、大臣の訓示の中で強姦や略奪をするな、などとはいえないので、婉曲な形で「名誉を持ちなさい」ということをいったのです。あくまでも、捕虜になるなということはいったかかったものではなかったのですが、このような言葉が入ったのは、この「戦陣訓」を作った段階で捕虜になることは恥だという考え方が、すでにあった証明でもあるのです。

むしろ重要なのは、1939年の「作戦要務令」だと思います。「戦陣訓」はただの陸軍大臣の訓示ですが、「作戦要務令」は御名御璽、つまり天皇の署名と印を押していますから、命令の格では「作戦要務令」のほうがはるかに上です。いずれにせよ、捕虜になることは恥だという考え方が広まっていけば、当然、連合軍の兵士を捕虜にした場合でも、相手の捕虜を恥さらしだという目で見ますから、それが捕虜虐待につながっていくのです。

加えて、日本軍は現地調達主義で、自分たちに必要な食糧は現地で調達するというやり方でしたから、中国の農村で略奪行為をするわけです。お金は持っていきますが、日本軍が刷った紙幣をもらっても現地の農民たちには何の役にも立たちません。仮に日本軍がお金を置いていったところで、これは略奪と同じです。中国も非常に貧しい農村も多かったので、自分たちの食べているものを持っていかれ多くの餓死者が出ることとなります。

当然、それに対して中国の農民たちは抵抗しますが、日本軍は抵抗すると殺してしまいます。あるいは略奪するついでに強姦をしたり、時には若い女性を拉致して慰安所のようなものを自前で作ったりしています。

一方、ニューギニアや太平洋の島々では、略奪しようにも略奪するものがないため兵士は餓死してしまったのです。

私の大学院時代の恩師で、藤原彰さんという日本軍事史の大家が晩年に書かれた本では、日本軍の戦死者は約230万人でその半分以上が餓死だといっています。これは厳密な意味での餓死だけではなく栄養失調状態での怪我や病気で亡くなっているケースも含めた広い意味での餓死です。

日本軍は、捕虜になることが許されないため、弾薬がなくなる、食糧はなくなる、もうこれ以上どうしようもないという場合に、最後に万歳突撃ということをししばしば行いました。ワーツと歓声を上げてアメリカ軍へ突っ込んでいき、バタバタと殺されていきます。もし、捕虜になることを許されていれば、白旗を掲げて米軍に保護されて生きられたのです。つまり、捕虜になることを許さないという日本軍の考え方によって、本来、生きられた人々が戦死させられたのです。

日本の軍人230万人の戦死者のうち、少なめに見積もって半数が餓死者だとしても、捕虜になることを許されていれば、おそらく少なくとも100万人以上の兵士が助かっていたでしょう。あるいは餓死だけではなく、どうしようもなくなってアメリカ軍に突撃していくということで亡くなった兵士を含めると、おそらく百数十万人の兵士たちは助かったわけです。なぜこのことが問題にされないのでしょうか。

天皇の戦争責任について

戦犯裁判、特にBC級戦犯裁判は私の専門で、その話をする時に必ず触れるのですが、加藤哲太郎の『私は貝になりたい』という本の中に「私は貝になりたい」という文章があります。本のタイトルにもなっていま

すが、もともとは一つの文章です。

彼は、関東学院中学(関東学院大学の前身)の出身です。戦中は陸軍中尉で捕虜収容所の所長でした。そのため、捕虜虐待の容疑で戦犯裁判により死刑判決を下されます。その後、減刑され巣鴨刑務所で服役したあと釈放されるのですが、刑務所にいた時に「私は貝になりたい」という文章を書いたのです。

彼は、巣鴨刑務所の中で、自分がやったことをどう受け止めるのかを考え「ある曹長の遺書」という形でこの文章を書きます。曹長とは日本軍の階級で軍曹の上、少尉の下、下士官の中で一番上の階級です。そのなかで次のように書かれています。「いったい私たちはだれのために戦争をしたのかしら、天皇陛下の御為と信じたが、どうもそうではなかったらしい。天皇は私を助けてくれなかった。私は天皇陛下の命令としてどんな命令も忠実に守ってきた、云々…、でも天皇陛下は私を助けてくれなかった…。死刑になろうとする曹長の遺書として書いていますので、自分が殺される時に天皇陛下は助けてくれなかったといっているのです。

「私は死ぬまで陛下の命令を守った、だからもう貸し借りはありません。もうあなたからお借りしたものは7、8本のたばこ野戦病院でもらったお菓子だけで…どんなうまい言葉を使ったってもうだまされません。あなたとの貸し借りはチョンチョンです。あなたに借りはありません。もし私がこの日本人に生まれ変わったとしても、決してあなたの思い通りにはなりません」。天皇の命令だからと言って、それに従う人間にはならないといっているのです。そして「二度と兵隊にはなりません。日本人にもなりたくない、いや人間になりたくない。牛や馬にも生まれたい。牛や馬だと人間にいじめられるからです。どうしても生まれ変わらなければならないのなら、私は貝になりたいと思います」と続くのです。

これは二度と天皇の命令にはだまされないという痛烈な天皇制批判です。「戦争という人間の概念が、無数の人間を奪ったのではない、戦争に従事したあなたがあなたの手で張三、李四を殺したのだ。山田や鈴木を殺したのだ。あなたとは誰か、それはあなた個人である」。彼がずっと巣鴨刑務所の中で考えたていたことは、戦争という抽象的なものが人を殺したのではない、殺された人には必ず一人一人、固有名詞がある。名前を持っているし、一人一人の人格を持っている人なんだといいたかったのです。

それを認識し、そういう人々を殺した日本兵も一人

一人に人格を持った、固有名詞を持った個人なのです。命令だけでは決して人殺しはできません。必ず実行する者がいるのです。だから、実行した自分たちにも責任があり、決して上官の命令だから仕方がなかったのだというように彼は逃げなかったのです。彼は実行者として自らの責任を取った上で自分にそういうことをさせた、そういう命令を出した上官の責任も追及するというのです。その責任追及は最終的には天皇までいくわけですが、決して上官の命令という理由で逃げずに本気で自分の責任について考えた人なのです。

彼は殺した側も殺された側も一人一人の人間なんだということを深く認識していました。これは先述の山本さんの写真とつながるものです。何十年もの人生を背負った一人一人を固有の存在として見ていこうというのです。だから、20万、30万人の殺害はけしからん、では10万人だったらかまわないのかと、1万人だったらかまわないのかという問題ではなく、具体的に一人一人を人間の存在として見ていくことの大事さを山本さんの写真展を見ながら、山本さんの視点と通じるものがあるんだなと思いました。

戦後日本の平和主義の問題について

戦後の日本の平和主義は、戦争だからこうなってしまったと、戦争に責任を転嫁してきたのではないのでしょうか。そうすると、だれも責任を取らなくていいのです。戦争が人を狂わせてしまったのだから、どんなにひどいことをした人間も戦争に責任があって自分にはないとみんな逃げられるのです。これは戦後の日本にとっての大きな問題だったのではないのでしょうか。

すべての戦争を否定する絶対平和主義は悪いとは思わないし、戦争そのものを否定すべきだというのは、それは正当な考え方であると思いますが、それが一面化されて戦争はすべて悪いとなると、侵略戦争はどうかということが問題にされなくなってしまいます。どんな戦争も悪いと一面化されてしまうと、侵略戦争とそれ以外の戦争を区別する意味がなくなってしまいます。だから、日本は憲法9条の平和主義の中で、侵略戦争という問題をきちんと考えてこなかったのではないかと思います。

たとえば、自分たちは普通の庶民で、上からいわれたことをやっただけで、だれも責任はないのだ、だから自分たちもみんな戦争の被害者だと、だれも責任を問われず戦争が悪いんだということで全部丸くおさまるのです。

100万人以上が飢え死にしたという問題も、すべて

戦争が悪いとされてしまうと、だれも責任を問われません。戦後の日本は、だれも責任が問われないような方法で問題を考えてきたのではないのでしょうか。そう考えると、実は被害の問題というのも、本気で考えてこなかったのではないかと思います。なぜ100万人の青年を飢え死にさせたのか、何が悪かったのか、だれが悪かったのか、どうすればそれを防げたのかということを考えることを放棄してきたのです。戦争は悪い、戦争はひどいということで、だれも責任を問われずに済まされてきたのです。

よく日本は加害の問題をあまり考えないで、被害のことばかり取り上げてきたといういい方をします。それは一面ではその通りだと思うのですが、実は被害の問題をきちんと考えてこなかったとも言えます。被害の問題を追求していけば、当然多くの兵士の命が粗末にされたのはなぜだったのかということが、同時に日本の加害も生み出しているわけで、加害と被害の問題をつなげて考えることができたのではないかと思います。

平和憲法と第9条と戦争責任

戦後、日本社会に蔓延する植民地主義、民族差別という問題を考えたいと思います。

重慶に対する空襲は、日本軍による無差別空襲で、まさにこれは犯罪なのですが、実はこれを推進したのは海軍です。有名なゼロ戦という戦闘機がありますが、ゼロ戦のデビュー戦がこの重慶爆撃でした。あたかも日本のプラスのイメージで語られていますが、ゼロ戦は無差別爆撃に加担した戦闘機として、航続距離が長く奥地まで行けるように開発されたものです。そういう無差別爆撃に加担した戦闘機をあたかも日本の誇りであるかのように語られるということ自体が、とんでもない話だと思います。海軍の重慶爆撃を推進した幹部の大西瀧治郎は、いわゆる航空機の特攻を始めた重要な人物で、それ以外にも日本の海軍の良識派、穏健派とか呼ばれる人々が推進しました。

戦後の日本の何人かの作家が書いたものの中でも、こうした海軍軍人は良識ある人々だと評価されています。彼らは国際法を意識していましたから、ハワイの真珠湾攻撃の時にも、軍事施設とそうではない施設を区分けして、できるだけ軍事施設を集中して攻撃をしています。しかし、中国に対しては無差別空襲を行っており、これは明らかにダブルスタンダードです。このようなダブルスタンダードの軍人たちを戦後の日本社会では良識派といったのです。これが現在までつなが

っている問題であろうと私は思います。

終わらない償い

日本にいる在日韓国朝鮮人、在日コリアンに対する差別の問題は、戦後の日本でも続いている問題です。例えば元軍人であっても、援護法の適用からはずされます。戦争中は日本人だから日本の軍人として動員しておきながら、戦後は日本国籍を失ったとって援護の対象からはずすような措置をずっととってきて、現在までそれが続いているのです。

日本国民の被害者の問題では、軍人軍属あるいは一部の準軍属という形で援護が実施されていますが、民間人の被害者には一切償いがされていません。空襲の被害者などがその補償を求めてたたかっています。国の戦没者追悼施設は千鳥ヶ淵にあります。極めて中途半端なもので靖国神社からはそういう一般の民間人は排除されているのです。侵略戦争に貢献した兵士には援護を行い、靖国神社に合祀するが、戦争に抵抗して弾圧の犠牲になった人々、あるいは日本軍によって殺された、日本軍の犠牲にされた人々には一切償わないという現実がずっと続いているのです。

日本の軍人も人間として扱われなかったと述べましたが、靖国神社に祀られて「神」となっていることで納得させられてしまっているのでしょうか。つまり、あれほど非人間的扱いを受け、本来生きられたにもかかわらず死を強制され、その結果名誉の戦死とされ、英霊となって靖国神社に合祀されることによって納得できるのでしょうか。靖国神社がそのような日本の国民の被害の責任を追及させない、ひとつの道具として機能しているのではないかと思います。それと同時にアジアの被害者には、一切償わないということは大きな問題です。

沖縄戦でも犠牲となり、戦後の基地問題でも犠牲にされている沖縄には現在、日本にいるアメリカ軍の専用基地の74%が集中しています。これだけ集中するのは沖縄が日本に復帰した後です。

日本にいる米軍の兵力数は、1955年には本土に85%に対し沖縄は15%だけですが、1960年には45%、現在では72%が沖縄です。米軍基地面積も1950年代だと日本全体の10~20%でしたが、現在は74%が沖縄にあり、沖縄の負担というのはどんどん増えています。つまり、日本の矛盾をどんどん沖縄に転嫁していつているのです。沖縄の人に対する加害の責任は、いまだに果たされないどころか、逆にその負担をどんどん強いるようなことをやっけてきているのです。

被害と加害の関係では、現在の犯罪でもそうだと思いますが、すべての加害者が生まれながらの極悪非道な人間かという決してそうではなくて、赤ん坊頃にはみんなかわいい赤ん坊です。それがいろいろな要因で加害者になっていくのです。

もちろん現代だと家庭内暴力だとか、あるいは私生活で差別されたりバカにされたりという経験だとか、様々な要因があり、加害者といっても100%加害者ではなく、被害者の側面が必ずあるのです。だからといって、殺人事件を犯せばそれが許されるわけではないので、これは加害者の責任は当然あります。人間の社会では、被害と加害は決して、だれかが100%加害者だというのではなくて、いろいろな被害を受けながら加害者になっていくということが常にあると思うのです。一人の人間の中に、被害と加害の両方の側面が常にあり、それを何とか、被害も軽くしながら加害もしないようにするという努力が必要なんだろうと思うわけです。

つまり、加害と被害というのは決して二分法で分けられるものではなく、常に重なり合っているもので、ただ、国というレベルで考えるとやっぱり日本は全体としては加害者としての側面が強くなります。侵略を受けた側は、被害者としての側面が強くなるということは当然なので、その違いは一緒にしてはいけなと思います。被害と加害の両面があるのです。

先述の山本さんの写真でも、実際に加害に関わった兵士の写真があります。本当に良心的な人たちが自分が加害に関わったことでに苦しみ、そのことを何とかしようと考えています。良心的であればあるほど苦しむという、そこを1枚の写真で訴えるものがあるのです。それをいろいろな形で、言葉でも説明しながら、そうした人々の戦後70年の重みをどうやって受け継いでいけるのでしょうか。現代の日本ではすごく困難な時代になりつつありますが、それは大きな課題で、私は言葉で何とかしようとしていますけれども、写真や絵あるいは映像、言葉でも詩や文学など、いろいろな形でこれを表現し、伝えていくことが必要ではないかと思えます。

過去の克服と未来への展望

現代はいわゆる新自由主義経済のもとで、強いものがどんどん勝って、弱いものあるいは普通の人々はどんどん排除されていきます。ほかの人々の苦しみや悲しみ、あるいは怒りを理解できない、共感しようとしていない人々が増えているのではないのでしょうか。

あるいは他者を誹謗中傷することによってでしか自分の正当性、存在を確認できない人々も増えているように感じます。政治学では「引き下げデモクラシー」という言い方をしますが、つまり、自分が良くなるという展望がある時には前向きになれるのですが、自分はもう良くならないと思う状況の中だと、自分が良くなるということよりも、自分より良さそうに見える人を引きずりおろそうとします。自分より少し良さそうに見える人を引きずりおろすことによって、自分が満足するような思考になっているのです。生活保護を受けている人でも、自分よりも楽をしているように見える人たちを引きずりおろすことによって、自分の満足を得ているのです。

これはたぶん日本社会全体が病理的で、自分が良くなるという見込みがあれば前向きになれるのですが、それが無い中でそういう行動に出てしまうのではないのでしょうか。その格好のターゲットになっているのがまさに中国や韓国、北朝鮮、あるいは在日の人々なのでしょう。あるいは生活保護を受けている人や基地撤去を訴えている沖縄の人々までもが標的になっているのです。

自らの過ちを認識し、反省し、克服するということは、自分の未来を生きる力になると思います。戦犯裁判の日独比較の研究もしており、ドイツの研究者と交流する機会もあるのですが、ドイツではニュールンベルグ裁判もBC級戦犯裁判も基本的に肯定しています。つまり、いろいろな問題点はあったにせよ、戦争の中で非人道的なことを、悲惨なことを減らすために戦犯裁判は有効であると、ドイツ政府ははっきりいっています。研究者全体もそういう理解です。

過去にひどいことをしたドイツの歴史、その事実をきちんと直視して克服してきた自分たちには、未来を切り拓く力があるという自信のようなものが感じられます。一方、日本社会は、過去の不都合なことから目を背けているため、過去を克服する力が作られてきていません。過去を直視することは、決して後ろ向きではなく、過去の問題を克服することを通じて、未来を作っていくという課題だろうと思っています。そういう力を作っていく上で、社会科学も重要ですが、人々に働きかけるには力が限られており、人々の共感なり感情なりにきちんと働きかける、そういう作業が必要だろうと思います。そのような意味で山本さんの今後の仕事には大変期待をしています。

《付記》

本稿は、2015年5月30日、立命館大学国際平和ミュージアム春季特別展「山本宗補写真展 戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」関連企画として開催した講演会における同名のタイトルの講演を再構成し、加筆したものである。